

参加者数 講演者12名 (うち外国人9名)
 参加者65名 (うち外国人13名)
 担当教官 山口楠雄教授

第4回生研国際シンポジウム

「マシンビジョンと人工知能の産業応用」および「生産自動化システム」に関する国際ジョイントワークショップ (共催 米国電気電子学会)

「マシンビジョンと人工知能の産業応用」および「生産自動化システム」に関する生研国際シンポジウム (組織委員長 坂内正夫助教授) が昭和62年2月2日 (月) から2月6日 (金) まで、六本木の東京大学生産技術研究所および、国際文化会館で開催された。

出席者約220名 (うち、海外30数名) が、86件の一般講演、4件の招待講演 (米国カーネギーメロン大学・KANADE教授、メリーランド大学・SAMET教授、尾上守夫本所名誉教授等)、電総研・日産自動車へのテクニカルツアーに参加、熱心な発表・討論が行われた。このシンポジウムはIEEE (米国電気電子学会) と生産技術研究所の共催で行われたもので、画像処理、産業電子、人工知能などの分野での理論から応用にわたる高度な情報交流、討論の場となり、内外からの参加者より高い評価を与えられ、生産技術研究所の国際交流活動推進に役立った。

期 間 昭和62年2月2日～2月6日 (5日間)
 参加者数 講演者90名 (うち外国人25名)
 参加者約220名 (うち外国人30名)
 担当教官 坂内正夫教授

第5回生研国際シンポジウム

「海洋工学の学問研究の将来ビジョン」

海洋工学は陸上工学と異なる特殊な環境下の物を扱う工学であるため、特有な課題が多く持続的な基礎研究を必要とする。現在、世界の海事産業は一時的に規模を縮小しているものの、将来とも優秀な人材の供給と基礎研究の発展を期待している。この度、

「非線形水波に関するIUTAMシンポジウム」を機会に、そのサテライト・ミーティングとして、内外の主要な大学の海洋工学の有力メンバーと海洋工学の人材養成と基礎研究のあり方について、各国の立場による特殊性や共通性を、比較的少人数で率直に討論した。中でも特に、コンセプト創造型の教育と問題解決型の教育のいずれに力点を置くべきかとか、水中音響を初めとする多数の基盤技術の取り込み方が議論された。その中で船舶の基礎研究も依然重要であるとの指摘が複数の先進国の人からなされたことは注目に値する。継続的な情報交換や国際共同研究を期待する発言もなされ、和やかな中にも真剣な有意義な会であった。

期 間 昭和62年8月31日～9月1日 (2日間)
 参加者数 講演者13名 (うち外国人7名)
 参加者61名 (うち外国人13名)
 担当教官 木下 健助教授